

NPO純正律音楽研究会会報 No.18

— 2006年12月発行

ひびきジャーナル



編集／発行 特定非営利活動法人 純正律音楽研究会

〒106-0031東京都港区西麻布2-9-2 Tel 03-3407-3726 Fax 03-3797-5640 e-mail:info@pure-music.ne.jp

-対談-
玉木宏樹の
この人と響き合う

指揮・作曲
早川正昭さん

早川正昭（はやかわまさあき）

一九三四年生まれ、千葉県市川市出身。

一九五六年東京大学卒業、一九六〇年

東京芸術大学作曲科卒業、翌年ヴィヴ

アルデイ合奏団を創設、数回にわたる

海外公演で、自作品「レクイエム・シ

ヤンティ」等を指揮して大成功を博

し、国際的に認められる。現在、新ヴ

イヴァルデイ合奏団常任指揮者、広島

大学名誉教授。弦楽専門誌「ストリン

グ」で「アンサンブルの泉」を好評連

載中。

玉木宏樹（たまきひろき）

一九四三年生まれ、神戸市出身。東京

芸術大学ヴァイオリン科卒。純正律音

楽研究会代表。作曲家・ヴァイオリニ

スト。

作曲家として指揮者として
ご活躍中の早川正昭さんは、
純正律演奏に関しても日本
の草分け的な存在。オーケス
トラの現場での純正律に関
する取り組みや現実など、幅
広く豊富なご経験にもとづ
くお話を伺いました。

ヴァイオリンでご挨拶

玉木 ストリング連載「アンサ
ンブルの泉」をたいへんおもし
ろく読ませていただいています
なるほどと思ったこともたくさ
んあります。今日は、連載に書
かれていることも含め、純正律
や様々な音楽よもやま話をきか
せていただければと思ってお
ります。

まずはご挨拶を……みなさん、
こんにちは！

（ヴァイオリンも

「みなさん、こんにちは！」
ストリングの連載に「女性の
喧嘩を表現できるヴァイオリ
ン」と書かれています。私も
冗談でよく、このようにおしゃ
べりヴァイオリンをやります。
みんなやったらいいと思います。
言葉をヴァイオリンで表現する
というのをやった方が音楽を
やるのに早いんじゃないかと思



プロほど知らない純正律の世界

います。

早川 器楽は言葉がないから、その分、そういうことが練習になると思いますね。

玉木 テレマンも歌のように奏け、と書いているらしいです。歌のように奏く、ということ、いつの間にか、ヴァイオリンを歌え、というようになっていく。「歌う」ということがどういうことかわからない。

早川 僕は、二十年前くらいにやっていた前回のストリングの連載でやはり、「歌う」ということについて書きました。「歌う」とは、歌のように奏く、歌っているように奏くことである、そして声楽のことなども書きました。普通の人は、「歌う」って言うわね、わからないですよ。玉木 そうですね。先生もわかっていないのに「ここは歌うのよ」なんて言っている。「え、ドレミっていうんですか？」ってことになる。

早川 よくそういう話聞きます

けどね、子供に教えると子供がそう言ったって(笑)。

玉木 僕は今、ストリングで「革命的音楽論」と題して、連載をやっていますが、青木編集長から「革命的演奏論」を書いてくれ、と言われます。いつも言っていることですが、音楽を歌う、というのは、テクニクだから、テクニクなしに「歌え」と言われても無理です。

テクニクの最初が「おしゃべりヴァイオリン」だと思えます。これは音程だけ教えたって意味が通じません。意味を通じてさせるために、音圧を工夫する、などがあります。これが手っ取り早い練習方法だと思います。

プロほど理解しない純正律

玉木 (ハーモニートレーナーを取り出して) この機械はご存知でしょうか。

早川 昔、使っていました。ハーモニーを聴かせるんですよ。

これが出る前から純正調の音叉と平均律の音叉を3本ずつ鳴らして聴き比べさせていました。

玉木 なるほど、そんな方法もありますね。私はハーモニートレーナーを使って違いを説明していますが、アマチュアで楽器をやっている人、プロになるのを挫折した人がよく理解します。プロの話は聴こうとします。プロの人にはわからない。だからどうした、俺は平均律だ、というのみです。

早川 アマチュアのコーラスやブラスのうまい所は終戦直後くらいから純正調を目指してしました。「純正調」という意識ではなく「ハモろう」という意識です。私もそれでやっていました。

純正律という言葉は知らなくても、きれいにハモろう、うなりをなくそう、いつもそういう風になっていました。

玉木 純正律の説明するときにゴスペラーズをよく例に出しますが、彼らは純正律なんて知ら

ないだろうけど、ピアノなしで



早川さん「アンサンブルの泉」玉木宏樹「革命的音楽論」レッスンの友社「ストリング」で好評連載中

よくハモっているときはものすごくきれいです。あれが純正律です。お互いに聴きあっている音を響き合わせればできるのです。しかし、プロの人は聴く耳もたない。

早川 凝り固まると駄目ですね。自然に音を聴いている人の方が敏感です。オーケストラではお

そろしいくらい平均律に凝り固まっている人がいます。あるヨーロッパのオーケストラでコンサートマスターをしている日本人が、オーケストラを平均律でやっていると言っているそうです。そんなオーケストラあるわけない。

玉木 それは撲滅しないと駄目ですね。ピタゴラスだったらわかりませんが。

早川 そうですね。私のオーケストラでは、ハーモニーは純正律で合わせようと思いますが、プロのオーケストラからきたエキストラが、バロック音楽の単純なハーモニーを合わせるのになぜこんなに時間をかけているのか、と怒っていました。いくら説明してもわからない。そういう人がオーケストラにはいます。かえってアマチュアの方がよくわかっている人が多くなってきたと思います。

旋律用の音程・和音用の音程

玉木 ストリングの連載に「モーツアルトの頃は旋律用の音程と和音用の音程を状況によって使いこなせることがプロの弦楽奏者の条件だった」と書いてらっしゃるんですが、今でもそうですよね。

早川 確かにそうですが、できない人がプロでやっています。

玉木 私はヴァイオリン2台のための楽譜を編曲しています。講師をしている洗足学園音楽大学の学生にやらせると、「むすんでひらいて」でも、純正律の音程が取れません。皆シヨックを受けます。弦楽器を専攻している大学院生でも知らないのです。

早川 普通の人はそうでしょうね。学校で教えません。

玉木 僕はうちにピアノがなかったのですが、耳が平均律にそまっています。ピアノの下のドソミは汚い、悲惨な音がします。それが気になっていました。高

校生の頃にウエーバーの音楽社会学を読んで、大全音、小全音、大半音、小半音というのを初めて知ってとてもシヨックでした。芸大に行ったらきつとそのことを教えてくれると思っていました。ところが一年のとき、芸大の先生が長三度は高くしないと合わない、短三度は低くしないと、と言う。

早川 そんな風でした。どこでもそうでした。本当に教えられる人がいなかった。

玉木 僕は悩んでいたのですが、そんなこと言われて逆上し、先生おかしいよ、長三度を低くしないとハモらない、と言うと、廊下に立ってろ、と言われました。芸大に幻滅しました。

早川 先入観で固まっているとそういうことになってしまします。実際にハモった音を聴かない。

玉木 自分でハモれないのかと思います。

早川 不思議ですね。

玉木 ピアノとヴァイオリンがどれだけ違うか、下のGをピアノにあわせて、ハモっている10度上のHをヴァイオリンで出す。ピアノの音を比べると高すぎる。みんなびっくりします。みんなそんなことを知らずに、ピアノに合わせることばかりします。

早川 海外では理論はわからなくても、ちゃんとした音程をとっている。伝統的にそうしています。ただ平均律が普及してから、プロの中であまり言わなくなりしました。

モーツアルト時代には常識だったことを、メロディのときとハーモニーのときは音程の取り方が違うのだという言い方をしない。日本では言わなくなっているから輸入しているので、そもそも知らない。誰も教えてくれないのでわからない。

玉木 また「(ドミソの)バランスが8:5:7のときにもっともやわらかくハモると言われている」と書かれています。これ

は、実際にはどう訓練するのでしょうか。

早川 訓練はしないでしよう。それは機械的に出す比率です。自然にハモって聞こえるバラ

実演を交えながら語る玉木宏樹

スだということ、実際にそれを出すために訓練したことはないです。ただそういう意識を持つ、知らないと知っているのは違います。真ん中だけ強くなるとおかしいので。

玉木 一種の目安ですよ。例えば音の違いが十四セント云々いうのも。

早川 そう。数字上、理論的にはそうだけれど、いちいちやってはいられない。そういうこ

わかった上でそう思っていれば、ということ。にやるというのは非常に難

。バランスもそうです。ピアノの伴奏でもドミソ

くときミを抜く、そういうを指導していると聞きますか 本当でしょうか。

早川 弱くひく方がいいですよ。強いときたないですからね。

広島大学で教えていたとき、ピアノ専攻の学生も副科でオーケストラをやります。二年から楽器を始めて、四年でやっとひけるようになるくらいですが、それである程度わかってくと、ピアノの学生はそれを応用するようになります。オーケストラでハーモニを作ることを学び、三音を強く聞くときたない、ということを学習するのです。ピアノでもなるべくきれいな音にする。オーケストラによってそれがわかるようになるのです。普通にやっていたらわからないでしょうが、こちらがやかまし

くいいますから。プロにそんなこというと反感を買いますが、アマチュアのオーケストラには細かく言いますから、三音を弱く、低く、理論はこうだが、わからなくてもいいから、自分でわかる程度にやるよう指導して

いました。

玉木 それは非常に良いことですね。

純正律の響きを知ろう

早川 また終戦直後頃、六大学音楽リーグ戦というのがありました。ラジオの放送で大学のオーケストラやジャズバンドの演奏を流します。審査員が講評するので、私の所属していた東大のオーケストラをほめてくれました。小憎らしいほどいい、と。いい楽器を使っているのだろうといわれましたが、そんなことはありません。ハーモニーを純正で合わせると、安い楽器でもいい音が出るのです。

玉木 私の経験則でも、平均律の場合はシステムが劣化すると音が駄目になります。純正律だと音響システムがどんなに劣化しても、純正が劣化するわけではありませんから、耳に感じる劣化度が全く違います。システムが駄目になっているとは聞こえません。それが純正律の力なんだろうな、と思います。

早川 楽器が悪くても会場が悪くても、純正律で響かせると良い音になりますね。

玉木 弱く奏いても遠くまで音が届きます。

早川 香港の音の悪い会場で日本のオーケストラが来た後、ウィーンフィルが来た。日本のオーケストラが来たときは会場が悪いんだなあ、と思ったけど、ウィーンフィルのときはそう思わなかった、という人がいました。大分昔のことですけどね。

玉木 以前ロンドンでECO（イギリス・チェンバー・オーケストラ）と仕事をしたとき、

会場は教会だったんですが、余韻が深くて豊かですから、ガーガー奏かなくても、ちゃんとおさまるところがおさまります。決してうまくはありませんが、アンサンブルトーンというのを非常に心得ていて、ふわっと奏している。

早川 そうそう。日本人はどうかすると頑張っちゃうから、響くところで頑張ると最悪ですからね。

玉木 そうです。僕は自分でも演奏するときに、最後落ち着くとき、いきなり終わるのではなく、間を空けるのが好きでした。その間を空けるということの意味が、海外に行つて分かりました。

止めて次に入る、その止めた瞬間に前の音の余韻がすうっと広がります。だから、なだれこまないで切る、というのがカッコいい。響きが楽しめます。そんなもんだらう、とは思ってはいましたが、ECOでやったと

に見事にわかりました。

川 海外でやると、全然違うですね。そういう空間が多いんですよ。日本は少ない。なかやろうと思つてもできない。本でずっとやっているのと、日的な音に戻つてしまいます。近は、大分響く場所ができてきました。しかし、日本で、

それはエコーつけすぎではないか、と思われる録音を、海外にもつていくと、エコーが足りないと、言われたことがあります。それくらい感覚ですからね。考え方はそのくらい違います。

玉木 私はかつて「ピュアスケールミュージックによる理想的ストレス解消」というCDを制作しました。純正律による演奏でエンジニアがびっくりするほどナチュラルエコーが出ました。早川 聴かせてもらいました。しかし、賛美歌的なハーモニーを美しく楽しむ曲は純正調で良いのですが、対位的なものが混じつてくると、一概にそれだ

けではできないですね。僕らは純正調を使うところとそうでないところを混ぜてやっています。ハモらせる所は純正調でやっています。昔からそうです。しかし、合唱団で全国的に有名なところがあつて、オーケストラ伴奏で指揮を担当したとき、合唱団だけでやってみたら、きれいにハモつてはいる。しかしテノールが内声で動くところがある。そこまで純正調でやっています。動いているから、それは純正調ではなく、と指導したらびつくりしていました。その合唱の先生は優秀な人で、有名な人ですが、全部純正調でやらせていたようです。

玉木 それは駄目ですね。私も対位法は純正律ではやりません。動きのあるものは純正調でやったら埋没してしまい、音楽になりませんよ。

早川 そういうところは純正調は使えないのだから、ピタゴラスでやるように、と指導したこ

とがあります。随分昔から純正調でやろうとしてる団体は、合唱やブラスでたくさんあります。ブラスで上手い所はみんなそうです。オーケストラの方が駄目です。オーケストラはいつまでたつても純正律がわからない人が多い。アマチュアのオーケストラで指導すると、「音程のこといわれるのは初めてです。他の指揮者は音程のことは全く言いません。言われた通りにしたら、気持ちいいですね！」と言われる、そんなことが多いです。オーケストラは指導者が駄目なのと、プロが駄目。日本ではそういう状況です。

テンポ・リズム・踊り

玉木 ストリングの連載ではリズム、テンポなどについても詳しく書かれていますね。私はいつも純正律、音程の話が多いのですが、本当はリズムの話もちゃんとしないといけない。前か

ら気を付けてはいるのですが、テンポの話はあまり深く追求したことがありませんでした。ただ、ベートーヴェンのメトロノームが壊れていた、というのは嘘だろうと思います。シューマンもそうです。

早川 あ頃はみんな速いです。メトロノームがおかしかったと言われていますが、ベートーヴェンのメトロノームは博物館にあつて今でもちゃんと動くそうです。ふたつでひとつに数えた、などというんな説がありますが、現在、自分たちがベートーヴェンのテンポで演奏できない。できたとしても音楽的に余裕がなく音楽としていいものがない。だから間違っているというのです。チェルニーもシューマンもあの頃の人のテンポはみんなそうです。速くて、書いてある通りにはできない。玉木 それは技術が退化しているのだと思います。早川 そうですね、速く奏く技

は。他のことはうまくなったかもしれません。中には速めにいておいた方がよいと思う人いたかもしれませんが、私のべた範囲では、当時のテンポのものです。

木 私は自分の作曲でほとんどメトロノーム表示は書きませ。スコア見ればわかるだろうと思うからなのですが。それからならないような奴は音楽をやべきではない、と。

川 書いた方が間違いは少ない。でも書いても信用されない、いう今の状況があります。書いてあっても無視されているから何にもならないけど、ある程度の目安にはなるのではないかと思えます。

玉木 演奏家って、偉そうに、作曲家の意図を代弁している、なんて言います。あんなの大うそです。よくわからなくてそう言っている。テンポの問題も全くそのとおりだと思っんです。「革命的音階練習」という本の

序文にも書いていますが、現代のヴァイオリニストは退化している。トータルに音楽を把握していない。作曲のこともわかっておらず、音程がいいかどうかばかり気にして遅くなる。かつてはみんな何でも楽器をやっていましたし、作曲をしたり、できない人も写譜をしたりしていました。今のヴァイオリニシカ奏かない人に比べたら音楽能力は上だと思えます。

早川 私は楽器は何でもやりま、プロでやったのはフルート、クラリネット、ホルン、打楽器、鍵盤楽器、ヴァイオリン、チェロ、コントラバス、またアマチュアのオーケストラのエキストラとして、オーケストラの楽器は何でもやりました。昔の作曲家はいろんな楽器をできた人が多い。それが普通でした。今はピアノだけという人が多いし、他の楽器をやってもひとつだけ、という人が多い。余裕がないのでしょうが。

玉木 私はNHKのテレビ小説で、予算が少なく、棒を振りながら、管楽器はできませんが、他は全部やりました。ハープもやって、ずるむけになりました。ポロロンくらいですが。

早川 私もハープを本番の4日前くらいから練習したら血豆がむけたことがあります。大きな音を出そうと思うと力がいりません。

玉木 実は妙齢の美女がやるような楽器ではないですね。

早川 娘（NHK交響楽団のハーピスト早川りさこさん）が先日TVに出て、手に豆ができてやすりでけするんだ、という話をしていました。

玉木 いろんな楽器をやっている、いい曲が書けないですよ。

早川 アマチュアを指導するときには役に立ちます。どこが悪いかわかりますから。無理なことを要求して時間をくうよりは、時間をかけて無駄だということ

はわかるし、少し直すとすぐ良くなることもわかります。

また、純正律とは関係ありませんが、私をもっと皆が知った方がいいな、と思うのは、踊りのことです。これからストリングの連載に書いていきますが、日本人は踊りを知らない人がほとんどです。海外では踊れなくても、身近でよく見ており、雰囲気分かる。だから舞曲の組曲をやるときにすぐできる。日本人は、二拍子、三拍子、速い、遅い、それだけでやっています。そうすると全然駄目です。それだけの差でしか、組曲の変化がない。バロックの組曲は調は同じですから、聞いている人が退屈です。わかっている人がきくとなお退屈です。日本人はそれがわかっていない。僕は留学して習いました。それを日本の学生に教えるんだけど、やっぱりピンと来ない。だから、子供に教えるとき、ワルツとメヌエットとどう違うんですか、ときかれて

さあ、どっちも踊りです、
「えるしかない。踊りを知ると知らないとは大違い。ほとんどの曲が舞曲のりを使っていきます。たいていいうリズムがあるのに、知らないで、譜面だけみて「懸命やっている、というの日本人の悪いところですよ。性がないと思われてしまう。人は踊りを知らないので損んでいる。楽譜通りやっていけは駄目です。」

躍動感がないですからね。
「この前、今住んでいる所（城県水戸市）の音頭を頼まして、「幸せ音頭」を作曲した。それをコンピュータに

「踊りのことを知ってほしい」と語る
早川さん

奏させると、符点で書いても、連音符八分の十二で書いても、頭にはならない。コンピューターでも性能によってはできません。普通、正確にその通りやると駄目です。楽譜でも見た人その通りに正確にやろうとします。まずいな、と思い、「Tempo di Ondo」と書きました。そういう考え方でいえない。Tempo di Minuteも同様の考え方です。メヌエットのリズムは1・2・3は均一ではないし、そういう微妙なことは楽譜では書けません。理屈で言ってもうまくいかない。踊りを知ってしまえばわかることなのに、それを知らずに機械的にやろうとしている。

玉川 日本人は律義ですからね。早川 それに、踊りに抵抗があるみたいですね。ウィーンに留学していたとき、バロック時代、ルネサンス時代の踊りなどについて学べる授業があったのです

が、男はみんなしり込みです。男は僕ひとりでした。踊る率はいいので勉強になります。やや肩身が狭い。私だって特好きなのではないが、それを知らないでバロックの組曲をやっても何にもならないと思いました。私は今まで、演奏と作曲と両方やってきましたが、これからはなるべく本来の仕事、作曲にしばって活動しようと思っています。それと同時に、演奏家自身が目覚めていない、知らないで損していることがたくさんあるので、踊りのこと、テンポのこと、リズムのこと、純正調のことなど、みんなに知ってもらいたいと思っています。ストーリーングでの連載もその一環です。

純正律音楽研究会の会員の方々もいろんなところで純正律の話が熱心にされるとよいですね。かつては純正調の話をして誰も相手にしてくれなかった。私も最初のうちは苦労しました。今は大分進んできた、わかって

いる人が多くなってきたと思います。

玉木　そうですね。我々、こういうことがあるって、「のだめカンタービレ」の作者に教えた方がいいですね。ドラマ化もされ、今、たいへん話題になっている漫画ですよ。踊りの話や、純正律の話吹き込んで漫画に取り入れてもらって、多くの人に知ってもらえるといいなあ。

(了)

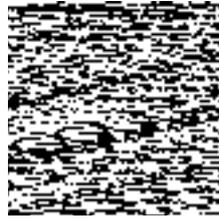
文責　純正律音楽研究会事務局

今、書いている本

について

純正律音楽研究会代表
作曲家・ヴァイオリン奏者

玉木宏樹



私は今、新しく音楽の本を書いています。2007年の3月から4月に出版芸術社から刊行予定「音楽の壁をぶっ壊せ(仮)」予価1500円位。もちろんこの本の最後のテーマは純正律ですが、全体にかなり激しく今までの音楽史教育を告発しています。ここではその中の始めの部分をご紹介しますよ。

〈この本のモットー〉

この本では次の言葉をモットーに

します。

☆音楽を難しく考えるのはやめよう。

☆ヴァイオリンやピアノ等の楽器も決して難しくない。

☆音楽を聴くのも演奏するのも「明快」を旨に。

☆絶対音感教育は百害あって一利なし。

☆演奏家はサービス業と心得よ。

☆指揮者は本当に偉いのか？

☆「芸術」かどうかを決めるのは聴衆である。

☆作曲家は台本作家と心得よ。

☆楽典はデタラメの集積である。

☆楽典は謎解きとして楽しもう。

☆日本の音楽史教育は間違っている。

☆ある時期までドイツは音楽文化の後進国だった。

☆演奏家は即興演奏をすべきである。

☆対位法やソナタ形式は即興演奏のデタラメさを枠づける役割だった。

いるのではないか」ということで

す。音楽教育といっても芸大をヒエラルキーとするプロ養成コースから、義務教育の音楽の時間まで、

幅は広いのですが、日本の場合、根幹は全く同じです。それはドイツ流理論であり、音楽家になんか

なるつもりはカケラもない子供たち

ちにやたら難しい楽典(実はデタラメの集積)を押しつけますから、

音楽の時間はちつとも面白くない

ことばかりで、評判は良くありません。

私は最近、あるきっかけから、

小学校の現役の音楽教師数人と話し合う機会を持ちました。その人

たちは実に真剣に、今の音楽教育

はおかしいと悩んでおられる人たち

ちなのですが、何が間違っているのか的確にはいえず、悶々として

おられるようでした。私は音楽の先生たちの一番分かりやすい間違いを指摘しました。それはいわゆる

「音楽の三要素」についてです。音楽の先生は必ず「音楽には三つの要素がある」と教えます。それは「メロディ」「リズム」「ハーモ

ニー」です。こんな決めごとが実際にドイツ的なのですが、まず「メ

ロディ」。これは単音でいいので、

誰にでも分かることです。次に「リズム」。これも単音で表現できるの

で分かりやすい。さて厄介なのが、「ハーモニー」。和音と訳しながら、

先生がピアノに向かって叩くのは「ドミソ」「ドファラ」「シレソ」

というドイツゴリゴリの和音です。そして「いいか、このドミソは美

しいから協和音という。よく覚えておくように」と言いながら、次にでたらめの音を叩き、「どうだ、

汚いだらう。これを不協和音という」と言って、もういちど「ドミソ」を叩き、「どうだ、きれいだらう、これがハーモニーの美しさだ。

う、これがハーモニーの美しさだ。よく覚えておくように」と言って

次の話に移ってしまいます。こないない加減な話はありません。ピアノで叩いた「ドミソ」が本当に

きれいかどうかの判断を子供たちにさせず、結果だけ言って先に行

ってしまうのです。私はその場の先生たちに訊きました。

「先生たちはドミソを本当に美しいと思ったことはあるんですか？」

……以下は次回にて。

平均律の普及の 思想的背景について (7)

純正律音楽研究会理事

黒木朋興

単位の「普遍化」、あるいは普遍的な基準値の設定は、当然、時の単位にも及ぶ。確かに革命暦や百進法の時計はすぐに廃れたが、それでも、革命以降の十九世紀の社会において、時の領域にも多大なる変化が巻き起こされたのである。

時や日付を決める行為が宗教や政治権力と深く結びついていくというのはいよいよ。暦を決めるといふことは祭や儀式の日も決めるということであり、そのような日には人やモノが大量に移動するので、暦の決定に

は多大なる権益が結びついてくるのだ。また、時を知らせることが、仕事を開始し、昼休みを取り、帰路につく、という人々の生活のリズムと深く結びついていくことも良いだろう。

かつて、時や暦は、太陽や月など星々の運行に完全に連鎖していた。砂時計や水時計はあったものの、所詮、細かい時を計るにしか適さず、一日の大きな流れを計るにはやはり日時計を頼りにしていたのである。このような日時計のシステムでは、当然、夏の日中の十二時間は夜の十二時間より長くなる。冬はその逆だ。つまり一時間の長さに違いのある「不定時制」が採られていたのである。さらに、各地で太陽の南中の時間を正午とみなす以上、経度の違いによって時刻が違っていたことは言うまでもない。

このような「不定時制」が、一日を均等に二十四時間に分割し計量する方法である「定時制」に移り変わったのは、十四世紀から十五世紀にかけて、機械時計が開発され普及して以来のことである。それまで空を見上げて時間を計っていた人々が、それからは機械を見つめて時を知るようになったのだ。だが、も

ちろん機械時計はとても高価で庶民の手に届く代物ではなく、人々は教会や市庁舎の塔に据えられた公共用時計によって時を知ったのである。人々は、例えば、教会の鐘の音によってのみ大雑把に時を感じるといって、緩慢なリズムの中に生きていたのだ。何時にどこそこで待ち合わせ、と言っても、各自が時計を持っていない以上、時間の厳守は不可能であった。更に、諸都市の機械時計がそれぞれ太陽の南中にあわせて正午の時を調整していた以上、各地の時計はそれぞれにバラバラの時を刻んでいたことになる。

大きな変化が生じるのは十八世紀のことである。ゼンマイの時計への応用が、時の刻みの正確さと時計の小型化に大いに貢献したのだ。各国政府、特にイギリスとフランスの王家は、クロノメーターと呼ばれる正確な時計の開発に莫大な資金を投入した。というのも、航海において船の位置の経度を正確に割り出すのに、正確な時間の計測が必要だったからである。海外経営における航海術の重要性を考えれば、領ける話ではある。同時に、それぞれの船に時計を備え付ける為にも、量産の為の技術が求められたことも言うまで

もない。ここで、時の計測によって経度の計算がなされたことを考えれば、機械時計の発達は前述のメートル法の設定とも密接に関わっていた、ということが分かる。

十九世紀に入ると機械時計の量産は加速する。教会・王侯貴族だけでなく裕福なブルジョワ層にまで、時計の所有が広がっていったのである。更に、携帯のできる懐中時計の開発が、徐々にではあるが、より正確な時間の運用を人々の生活の中に浸透させていった。

特にこの時期で特筆すべきは、標準時の設定であろう。それまではそれぞれの都市の大時計はそれぞれにバラバラの時を刻んでいたのに対し、これ以降、ヨーロッパの時計は首都と同じ時間を刻むようになる。例えば、フランスでは視覚信号の発明により王政復古期（一八一四・三〇）にパリの南中時間が全国に伝達されるようになるし、イギリスではロンドン塔の大時計が一八一〇年に電動化され、グリニッジに繋がれた。更に、鉄道網の普及とその運行が、この標準時の普及を加速させることになる。

寄稿

音楽療法活動からの純正律音楽との出会い

群馬音楽療法研究会 事務局長 吉江 福子

(純正律音楽研究会正会員)

私と音楽療法との関わり、そして純正律音楽研究会への入会のこと、ご家族も心の辛さを抱えた方が沢山おられます。その方々と接するうちに私は薬とは別に心を支える「何か」が必要なのではと考えるようになりました。

そのきっかけは十年前にデイサービスセンターの施設長になった時のことです。利用者の方々と毎日工夫しながら音楽を導入していくと次第に皆さんが明る

くなり、積極性も出てきました。

認知症の方でも音楽を利用する時間は楽しそうに歌われ不穏行動も軽減され、その変化に驚くこともしばしばでした。その頃が偶然にも日本で音楽療法への感心が高まりつつある時でした。私も音楽療法の勉強を始め、地元での啓発のために平成十二年四月に群馬県で最初の音楽療法研究会を立ち上げ講演、セッションなど試みしました。

しかし勉強すればするほど評価が難しいと思うようになりました。

最近、「テラーメイド医療」と言う個々にあった薬の選択の研究が進んでいます。音楽療法も

同じでクライアント個々にあったものを探すために沢山の音楽や音楽を準備する必要があります。私は多くの人が共通に心地良く感じる音楽、日本人にあった音楽は何かを求めています。

その中で本年度は在宅での緩和ケアと音楽療法の研究の機会を得ました。その一例と純正律音楽との出会いを紹介致します。

その患者様は骨転移で痛みがひどくて入院し、ペインコントロールが終わり、在宅にお帰りになられたばかりでした。数ヶ月前には歩いて薬を取りに見えたのに歩行も困難になられていました。モーツァルトが大好きで部屋には大きなスピーカーを置かれていました。

しかしお薬を届けに行くとき大変弱気になられ、音楽を聴く気にもなれず、食欲もなく「もうだめかも知れない」「もう一度早く入院したい」と言われるばかりでした。その方には音楽療法のことを話してありましたが、もう無理か

と思うほどでした。

同じ日に偶然に国連支援交流協会から純正律音楽のご紹介の資料が届いたので。私はすぐに研究会にご連絡致しました。そこで運の良いことに玉木先生と直接お話ができ、CDを送って頂き、わずか二日でその方の部屋で先生のCDと一緒に聴くことが出来ました。部屋に澄んだ音楽が流れ、その方はじっと聴き入りました。数日訪問し、一緒に音楽を聴き語り合ううちにその方の心に変化が起こり「頑張ろう」という気持ちが出て、食欲も増して来ました。今では「入院より家が良いい」と言われ奥様も喜ばれ、外来で先生に頑張っていますねと褒められています。私は良いタイミングで玉木先生に出会えたことを感謝しました。私の周りでは純正律音楽をご存知ない方が多いのでもっと沢山の方に聴いて頂くと思っています。



CDレビュー 純正茶寮

義太夫三味線 鶴澤清治の世界 東北の尺八 霊慕 中村明一

流 NAGARE -三糸 SANSHI-

純正律音楽研究会 代表 玉木宏樹

邦楽はすばらしい
私は今、来年の春に出

る予定の新しい本を書い
ています。その一章に「邦
楽を聴こう」という章が

あり、そこでおすすめす
るCDをさがしていたら、

とても面白いのに出逢い
ました。邦楽は基本的に

は旋律的ピタゴラスで、
ハモリの純正律ではあり

ません。しかし、琵琶や
三味線の「サワリ」と尺

八の奏法には強力な倍音
の世界があります。倍音

は純正律の源です。
(一) 中村明一

「霊慕 東北の尺八」
日本文化振興財団

VZCG610 ¥3,150

アメリカでフリージャ
ズの勉強もした中村さん

のこの一枚には私も完全
に参りました。延々と続

く循環呼吸や「のど」ト
リル、激しい息づかいに

よる二重音、三重音の音
と空気の嵐、酒飲んで深

夜に聴くとアブナイ一枚
です。音は全くちがうけ

ど以前ショックを受けた
「シスターン・チャペル」

(貯水槽の十人のトロン

ボーン)とも似た世界か
な?

(二) 義太夫三味線
「鶴澤清治の世界」

コロムビア

COCJ325332532
¥2,500

津軽で使う太棹とは全
くちがう音色の義太夫三

味線のソロアルバム。太
夫の唄のないソロは珍し

い。頭からビンビンとサ
ワリの倍音がとびかい、

すさまじい。後半は山屋
清編曲のコロムビアオー

ケストラとのアンサンブ
ルで、これがまたびっく

りの十六ビート。太棹は
津軽だけではないぞ!

(三) 「流 演奏三糸」
ノーザンライツレコーズ

NLRCD7212 ¥2,800

私も関係している現代
邦楽研究所の山本晋乃、

上原潤之助による細棹デ
ュオユニット。二人のう

たう小唄、俗曲類の日本
語がとても分りやすくき

こえるし、細棹三味線の
特長がよくでており「ソ

ーラン」とか現代邦楽「呼
応」が面白い。



純正律イベントレポート

06年10月21日(土)

富士山アリーナ(山梨県)

「富士吉田ボランテア祭」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)・福田六花(講演)

山梨県の認知症と家族の会の役員であり富士吉田ボランテア協会に携わっている渡辺スミ子さんからの依頼で出演しました。

06年10月26日(木)

十字屋ホール(東京都中央区)

「ピュアミュージック 純正律音楽の世界」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン) ほか
主催|| 田辺製菓株式会社

田辺製菓によりボランテア活動の交流の場として開催されている「MSCボランテアサロン」に出演しました。

06年10月29日(日)

片岡マンドリン研究所(東京都)

「純正律デュオコンサート」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)・三宅美子(アイリッシュハーブ)

マンドリン愛好家の皆さんに、ジャンルの違う楽器や音楽から何かを学んでもらえるように身近に親しみやすい音楽を提供したい、という趣旨の企画。三宅美子さんはミントのハーブでの初舞台。音楽とおしゃべりを楽しむ和やかな雰囲気のコンサートとなりました。

06年12月16日(土)

フレンズ(東京都港区)

「土曜のお茶会」

純正律のクリスマス

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)・高木真理子(アイリッシュハーブ)

主催|| 純正律音楽研究会

ヴァイオリンとミントハーブのデュオで、賛美歌と来年発売予定のCD収録曲を披露し、純正律のあたたかいハーモニーをお楽しみいただきました。また玉木宏樹の今年の主な活動を振り返るとともに、来年は書籍やCDの発売などを通して純正律普及活動を展開していく、と意気込みを語りました。

06年12月18日(月)

野田中央病院(千葉県野田市)

「純正律デュオコンサート」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)・高木真理子(ハーブ)

患者さんや近隣の方々に集まっていたいでこのコンサート。天井が高く響きの良い環境で、純正律をお楽しみいただきました。

06年12月20日(水)

デイ愛甲原(神奈川県伊勢原市)

「三周年記念コンサート」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)
主催|| デイ愛甲原

地域に根ざして活動をしていらっしゃるデイ愛甲原にて、今年の春に引き続き2度目の出演となりました。高齢者の方、地域

の方々が集まった、あたたかいコンサートとなりました。

06年12月21日(木)

鎌倉芸術館小ホール(神奈川県)

「クリスマスコンサート」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)・水野佐知香(ヴァイオリン)
主催|| 鎌倉笑顔の会

今年の夏に引き続き、鎌倉芸術館に登場、今回は、水野佐知香さんとのデュオをお楽しみいただき、大好評でした。
☆今後のイベント予定は決まり次第お知らせします。

純正律トピックス

●NHKラジオ深夜便で玉木宏樹が「純正律」を語る!

十月八日(日)と九日(月・祝)の二日間、早朝午前4時から各40分、大人の聴ける静かな番組として中高年層を中心に多くの方に親しまれている人気番組「NHKラジオ深夜便」に玉木宏樹が登場。「ハーモニーで癒したい」純正律の不思議〜と題し、純正律とは何か、純正律の癒しの効果、純正律との出会い、純正律の今後など、楽しくたっぷり語りました。反響はたいへん大きく音色に感激した、初めて知って衝撃だった、もっと詳しく知りたい、CDを聴きたい、とても良い音楽だと思ってもっと普及活動を頑張ってもらいたい、など、たくさんの方が事務局にも寄せられました。
●CD「時」が再発

NHKラジオの反響を受けて、品切となっていたキングレコード「時」が再発されました。純正律ギターの「枯葉」などが収録されています。全国の主要レコード店でお求めいただけます(KICS2346・税込定価2500円)。

●純正律で野菜を育てる!

純正なハーモニーは、植物にも良い影響があるのでは、という仮説のもと、純正律を聴かせた野菜の栽培が試みられています。現在は千葉県富里市と茨城県土浦市の二箇所の農家でキュウリなどが作られています。純正律を聴いた野菜は果たしてどんな味でしょうか。この実験の結果についてはまた会報で紹介したいと思います。

●新刊「音楽の壁をぶっ壊せ!」(仮) 刊行予定

現在、玉木宏樹は新刊を執筆中、二〇〇七年春頃に出版芸術社より刊行予定です。音楽を難しく考えるな、ドイツ音楽中心の音楽史批判、純正律の力などについて、玉木節で語ります。詳細は決まり次第お知らせします。乞うご期待!

純正律音楽研究会発起人 福田六花（医学博士、作曲家）

2006年は作曲はあまりせず、医学の論文も1本も書かずに、ひたすら走った一年であった。年間で18レースの様々なマラソン大会に出場した。

2006年最後を締めくくったのはホノルルマラソンである。一般的にはホノルルマラソンと云えば、全てのマラソンランナー憧れの、マラソン大会最高峰と云ったイメージであるが、実際は日本の某航空会社が仕組んだ、日本企業による、日本人のためだけのマラソン大会である。参加は25000人でその80%は日本人であり、完走制限時間は特になく、全行程を歩いて半日かけてゴールインしてもマラソン完走の栄誉を頂ける非常に甘い大会である。日頃厳しいトレーニングを積んでいるランナー達から見れば、こんなふざけた大会は認められない、それがホノルルマラソンである。

そんな理由で以前から僕は、ホノルルマラソンだけは一生走ることはないだろうと思っていた。ところが昨年（2005年）、ターザンと云う雑誌の企画でホノルルマラソンに行くことになり、実際に走ってみて印象が大きく変わった。確かに25000人の参加者のうち真剣にマラソンを走っているのは5000人程度で、後の20000人はほとんどトレーニングもしていない、最初から歩くつもりで観光客である。ただしコース、雰囲気、イベントとしてのスケール、どれをとっても十分に楽しめるマラソン大会であった。

そして2006年、今度はストーリー（光文社）と云う女性誌のホノルルマラソン企画のサポートで走ることになった。オーディションで選ばれたマラソンビギナーの女性読者6名が、8ヶ月のトレーニング期間を経てホノルルマラソンにチャレンジする、その<チームストーリー>が本番を走る際のサポートである。2005年は自分が取材を受ける側であり、ベストタイムで走りたいと云う緊張感が非常に強く、苦しい展開だったので、今回は自分も十分に楽しもうと決めてハワイへ向かった。

12/10 AM 5:00、まだ暗い早朝、スタートの号砲と共に25000人が一斉にスタートした。まずはスタートと同時にホノルルの夜空を埋め尽くすきれいな花火を楽しみ、ダウンタウンのクリスマスイルミネーションを楽しみ、ダイヤモンドヘッドの坂を駆け上がり、フリーウェイを走りながら夜明けの海を眺めて、ひたすら走り続けた。一緒に走る<チームストーリー>のメンバーの走りやすいペースで伴走しながら、ドリンク、ゼリー、各種サプリメントを手渡し、アドバイスを送り、デジカメで走るメンバーを撮影し、トランシーバーでコース上に待機している編集者、カメラマンと連絡をとりながらの42.195キロの旅は楽しかった。たくさんの友人達にも遭遇し、声をかけてもらい、<チームストーリー>も6名全員見事に完走して、2006年のホノルルマラソンは終わった。

ホノルルマラソンの夜、ホノルルの街はフィニッシャーシャツを着て、足を引きずりながら満足げに歩くランナー達で溢れ返っていた。2007年、僕と一緒にホノルルマラソンに行きませんか。

福田六花 official web site <MELODY LION>

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~ricka/>